

国語

法、経済、経営、人文、心理、現代社会、グローバル・コミュニケーション、総合リハビリテーション学部

I 次の文章は、鴨長明『無名抄』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。【50点】

俊恵法師語りていはく、^{注1}「三条の大相国、^{注2}非違の別当と聞こえける時、^{注4}二条の帥と二人の人、^{注3}躬恒・貫之が劣り勝りを論ぜら^①れけり。アかたみにさまざま言葉を尽くして争は^②れけれど、^①さらにこときるべくもあらざりければ、帥いぶかしく思ひて、『御気色を取りて勝劣きらむ』とて、^{注5}白河院に御気色給はる。仰せにいはく、『われはいかでか定めむ。俊頼などに問へかし』と仰せごとありければ、ともに^{注6}その便を待た^③れけるほどに、二三日ありて、俊頼まゐりたりけり。帥このことを語り出でて、初め争ひそめしより、院の仰せのおもむきまで語ら^④れければ、俊頼聞きて、たびたびうちうなづきて、『躬恒をば、**エ**あなづらせ給ひそ』といふ。帥思ひのほか覚えて、『されば貫之が劣り侍るか。ことをきり給ふべきなり』と責め^⑤れど、なほなほただ同じやうに、『躬恒をばあなづらせ給ふまじきぞ』といひければ、^{注7}『おほしおほしことが聞こえ侍りになり。おのれが負けになりぬるにこそ』とて、^カからきことにせられけり。まことに、躬恒が詠みくち、深く思ひ入れたる方は、またたぐひなき者なり』とぞ。

- 注1 俊恵法師……………平安時代の歌人。一一一三年—没年未詳。長明の師。
- 注2 三条の大相国……………藤原実行。平安時代の歌人。一〇八〇年—一一六二年。
- 注3 非違の別当……………^{けびいし}検非違使の別当。「^{けびいし}検非違使」は、京中の違法行為を取り締まった官職で、「別当」はその長官。
- 注4 二条の帥……………藤原俊忠か。平安時代の歌人。一〇七三年—一一二三年。
- 注5 白河院……………白河天皇。一〇五三年—一一二九年。
- 注6 俊頼……………源俊頼。平安時代の歌人。生没年未詳。
- 注7 おほしおほし……………大体。

問1 傍線ア「かたみに」のここでの意味として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A かわるがわる B 散々に C 熱心に D 思い出に E 互いに

問2 傍線イ「さらにことさらにこときるべくもあらざりければ」の現代語訳として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 事態が混乱してどうしようもなかったので
B まったく決着がつきそうにもなかった
C どうにも議論が終わりそうにもなかった
D きつぱりあきらめることもできなかった
E それでも二人は仲違いをしそうになかった

問3 傍線ウ「その便」とあるが、その内容として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 白河院の仰せ B 白河院からの仲介 C 俊頼からの手紙 D 俊頼の都合 E 俊頼に会う機会

問4 空欄Iに入る語として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A また B さらに C な D もしや E よも

問5 傍線オ「あなづらせ給ふまじき」を品詞に分けた場合、正しいものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 動詞 + 動詞 + 助動詞 + 助動詞
B 動詞 + 動詞 + 助動詞 + 名詞 + 助動詞
C 動詞 + 助動詞 + 動詞 + 助動詞
D 動詞 + 助動詞 + 動詞 + 助動詞 + 助動詞
E 動詞 + 助動詞 + 動詞 + 名詞 + 助動詞

問6 傍線力「からきこと」とあるが、その説明として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 三条の大相国と争っていた二条の帥は、自分が負けたことをつらいと思った。
- B 二条の帥と争っていた三条の大相国は、自分が勝つたことをうれしいと思った。
- C 三条の大相国と二条の帥の争いに巻き込まれた俊頼は、間にはさまれて大変だと思った。
- D 三条の大相国と二条の帥の争いの話を聞いた俊恵は、結果を知ってつらく感じた。
- E 躬恒の方をすぐれていると思っていた二条の帥は、自分が負けたことをつらいこととした。

問7 傍線キ「れ」と文法的に同じものを、次のA～E（本文中の波線①～⑤）の中から一つ選べ。

- A 論ぜられ^①
- B 争はれ^②
- C 待たれ^③
- D 語られ^④
- E 責められ^⑤

問8 傍線ア・イ 二重傍線a「躬恒・貫之が劣り勝り」について、次の(1)・(2)に答えよ。

(1) 傍線8「躬恒・貫之」は歌人であるが、彼ら二人ともが関係している作品として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 万葉集
- B 古今和歌集
- C 新古今和歌集
- D 土佐日記
- E 伊勢物語

(2) 傍線9 二重傍線aについて、最も適切なものを、次のA～Fの中から一つ選べ。

- A 三条の大相国、白河院、俊頼は躬恒をすぐれていると考え、二条の帥は貫之がすぐれていると考えていた。
- B 三条の大相国、白河院、俊恵は躬恒をすぐれていると考え、二条の帥は貫之がすぐれていると考えていた。
- C 三条の大相国、俊頼は躬恒をすぐれていると考え、二条の帥、白河院は貫之がすぐれていると考えていた。
- D 三条の大相国、俊頼、俊恵は躬恒をすぐれていると考え、二条の帥、白河院は貫之がすぐれていると考えていた。
- E 三条の大相国、俊頼、俊恵は躬恒をすぐれていると考え、二条の帥、長明は貫之がすぐれていると考えていた。
- F 三条の大相国、俊頼、俊恵は躬恒をすぐれていると考え、二条の帥は貫之がすぐれていると考えていた。

問9

10

この文章の内容と合致するものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 俊恵は、三条の大相国と二条の帥が躬恒・貫之の歌のことで論じあっている場面に同席していた。
- B 三条の大相国と二条の帥は、ちょうどその場にいらっしやった白河院に裁定をゆだねることにした。
- C 話を聞いた白河院は、自ら裁定をくだすことはせず、歌のことは俊頼にまかせることにした。
- D 三条の大相国と二条の帥から呼び出された俊頼は、俊恵と相談して躬恒・貫之の勝劣をのべた。
- E 長明は、白河院と俊頼を巻き込んだ三条の大相国と二条の帥の論争をおもしろいことだと感じた。

II 次の文章は、山口航『みなまで言うな』は通じないの一節である。これを読んで、後の問に答えよ。【50点】

自己認識と他者からの視点には、^①オウオウにしてズレが生じる。それが顕著に表れたのが、一九九〇年前後に巻き起こった「日本異質論」である。貿易摩擦などを背景として、日本の政治経済のシステムが西欧近代国家の普遍的なそれとは異なり、「自由で開かれていない」と批判的に論じられた。

また、ほぼ同時期の一九九三年には、自民党衆議院議員であった小沢一郎の名で『日本改造計画』が刊行され、日本は「普通の国」になれと提言された。内外の変化に対応するために、政治や経済、社会のあり方や国民の意識を変革し、「世界に通用するもの」にしなければならぬ」との主張である。

「日本異質論」も「普通の国」論も、日本が国際標準から乖離^{かひり}しているととして、その「特殊性」を批判的に捉える点では、^②キを一にしている。これは、社会学者のエズラ・ヴォーゲルが、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（一九七九年）で「日本的経営」などの諸制度を取り上げ、日本の「特殊性」を肯定的に論じたのとは対照的であった。

こうした議論の構図は、^ア韻を踏んで繰り返されている。新型コロナウイルス感染症をめぐっても、一方では、海外に及ばない検査数や、ワクチン接種やデジタル化の遅れといった、日本の「特殊性」が否定的に受け止められた。他方、国際的に見れば、死者数や感染者数が相対的に少ないのは、日本人の国民性や体質に要因があると、その「特殊性」が肯定的に見られたこともある。いずれも、日本の「特殊性」を前提とする点においては共通していたのである。

その「日本異質論」の代表的論客、ジャーナリストのカレル・ヴァン・ウォルフレンは、日本にはアカウンタビリティが欠如していると主張した。権力者が政策について人びとにきちんと説明し、人びとは権力者に方向性を指し示す。このようなコミュニケーションが日本にはない、と論じたのである（『人間を幸福にしない日本というシステム』）。

こうした指摘もあり、とくに一九九〇年代以降、アカウンタビリティは、さまざまな文脈で追求されることになった。政治面においても、平成の一連の改革は、アカウンタビリティを導入し、透明性を高めようとしたものである。当時、リクルート事件や東京佐川急便事件に端を発して、「政治とカネ」をめぐる政治に対する不信感が強まった。不透明な政治の温床が中選挙区制に求められ、政権交代可能な二大政党制がその解決策であるとされた。

かくして、政治改革関連法が一九九四年に成立した。これにより、アカウンタビリティを果たせなかつた与党を選挙で交代させられる制度が、(まがりなりにも) 整えられることとなった。また、中央省庁再編に結実する一九九〇年代後半の橋本行革^{注1}でも、「国民への説明責任の徹底」が謳^{うた}われており、アカウンタビリティは当時の改革の気運を象徴する言葉である。

近年、¹アカウンタビリティのリバイバルが生じているように思われる。たとえば、デロイトトーマツグループの「二〇二二年ミレニアル・Z世代年次調査」によると、世界的に見て、ミレニアル世代(一九八三〜九四年生まれ。筆者もこの端くれである)やZ世代(一九九五〜二〇〇三年生まれ)と呼ばれる若年層は、アカウンタビリティを重視する傾向があるという。「自由で開かれた」という理念は、こうした³チヨウリュウウとも合致している。

これを筆者は、「みなまで言うな」(事情は察したからすべてを説明しなくてよいの意)への反発と理解している。

言語化されない仲間内の「伝統」に従うことが求められ、暗黙の了解から意図せず逸脱してしまった場合には、「空気が読めない」として冷遇ないし排除される。はたして、これが「自由で開かれた」社会であろうか。権威主義国家を非難しながら、あるいは、政府が「リベラル」ではないと批判しながら、身近な人に不寛容に振る舞う矛盾がなぜ見過ごされているのか。身の回りのハラスメントから、格差、差別、人権、環境問題などにいたるまで、説明がつかない因襲は、この世代には受け入れがたいのである。

たしかにアカウンタビリティと言っても昔よりはマシだ、と過去を知る世代は思うかもしれない。だが、若年層には^ウがなために、そう言われたところで実感がわかない。

戦争についても同様である。この世代は「戦争を知らない子供たち」の子どもたちや孫たちである。太平洋戦争どころか冷戦などの「大きな物語」を、そもそも実体験としては知らない。したがって、戦勝国から「押しつけられた」憲法の屈辱を忘れるな、あるいは、最近では戦争の記憶が薄れ「右傾化」⁴していて危険だ、と説教されても、響くはずもない(戦争体験をいかに受け継いでいくかは別の課題である)。

かつては、「押しつけ憲法」や「右傾化」の議論をもち出せば、「水戸黄門のイン⁴ロウ」のごとく、相手が沈黙することもあったであろう。だが、こうした形式美を愛^めでる余裕が、いまやこの国にあるとは思えない。

もっとも、「アカウンタビリティが不十分である」と言うときには、主体的に相手に説明を求める必要があることも忘れるべきではない。「説明する責任」を一方的に相手に押しつけ、自らの「説明させる責任」を不問に付してはならないのである。そして、説明を

求めるからには、それを聞かねばならない。

説明させる努力をしなかったのであれば、それは怠慢である。相手が真摯に説明をしているのに耳を傾けなかったのであれば、それは傲慢である。

評論家(元・歴史学者)の與那覇潤が論じるように、ローカルな慣習や暗黙の合意で処理されてきた事案が白日の下にさらされるや、糾弾が殺到し、誰も弁護できないというマス・ヒステリーは、もはや定期的な祭礼として定着した観もある(『平成史』)。そこに、説明を求める姿勢はない。アカウントビリティの欠如を批判する(スタンスをとる)側が、一方的な振る舞いによって、アカウントビリティを喪失してしまっている。

もちろん罪は裁かれねばならない。だが、それをもつばら人民裁判や私刑に委ねるのは、「自由で開かれた」法治国家ではない。

多様化する社会のなかでは、幅広い合意の形成が難しくなっているのかもしれない。それでも、自己とは違う存在を認識する想像力を涵養し、同意はできなくとも、相手の説明に耳を傾けて対話を諦めない姿勢が、「自由で開かれた」社会をめざすのに不可欠なのはあるまいか。

このことを掘り下げていけば、ある難問に突き当たる。それは、「自由を認めず開かれていない」相手に対しては、「自由で開かれた」態度を放棄してよいのか、という問いである。これは国際的な秩序を追求する際にも当てはまる。

もちろん、既存の国際秩序に挑戦する国や人権問題が生じている国などに対しては、毅然として対処しなければならぬ。政策の手段同士はときとしてトレード・オフの関係にあるため、一定の対立や不利益を覚悟する必要もある。

さりとて、長期的には、そのような国が少しでも望ましい方向に向かっていくよう懲慚すべきであろう。相互依存の進む世界においては、何らかのかたちで関わっていかねばならないのである。嫌な相手とは縁を切ればいいという発想は、想像力が欠如している。「自由で開かれている」か否かを踏み絵として、適合しなかった国を排除し溜飲を下げるのは、建設的な態度とは言えない。

たしかに、「自由で開かれた」という大風呂敷を広げることには、オモハゆいと感ぜたり冷ややかに見たりする向きもあろう。「この国のかたち」はニュアンスに富んでおり、このような単純なキャッチフレーズでは言い表せない。

しかし、表現できないから察しろと求めるのは、これからの世代には通じない。難点も多々あるが、それでも、理念を言語化することには意義がある。もし実情にそぐわないのであれば、柔軟に修正していけばよからう。十分に「自由で開かれている」から理念を

打ち出すというよりも、理念を掲げることで「自由で開かれた」秩序が形成されていく側面もある。
こうした理念を謳うだけで満足するのではなく、その意味を絶えず問うことによって、「この国のかたち」を見直し続ける姿勢こそが肝要である。

注1 橋本行革……橋本龍太郎首相の政権が一九九六年以降進めた一連の行政改革をさす。

注2 慫慂……ある行為をするよう誘い、強くすすめること。

問1 11 15 二重傍線①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次のA～Dの中からそれぞれ一つずつ選べ。

11 オウオウに

A 警察が密輸品をオウシユウした。

B オウダン歩道を渡ろう。

C 君はいつも食欲がオウセイだね。

D 患者にキオウシヨウを尋ねる。

12 キを一にして

A 日本はシキの美に恵まれている。

B このままでよいか、人生のキロに立っている。

C 彼の行動はジヨウキを逸していた。

D それはしよせんキジヨウの空論だよ。

13 チヨウリユウ

A 観客の興奮はサイコウチヨウに達した。

B 他人の失敗をチヨウシヨウしてはいけない。

C 家に届いたチヨウカンを読む。

D 彼は喜びでウチヨウテンだった。

14 イン ロウ

A 村のチヨウロウに話を聞く。

B 漢詩で「黄鶴ロウ」について学ぶ。

C ロウジヨウした敵を一気に攻める。

D なかなかロウヒ癖がなおらない。

15

オモ^⑤ハゆい

- A この件は大エイダンを下す必要がある。
- B 新聞は世論をハンエイすると言われる。
- C 月は地球のエイセイである。
- D 遠足でクラス写真をサツエイする。

問2

16

傍線ア「韻を踏んで」のここでの意味として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 違う場所と同じような展開をしながら
- B 不思議なほどそっくり同じままで
- C 規則的に何度も繰り返し返す形で
- D 同じではないが類似性を持って
- E 時とともに次第に強くなりつつ

問3

17

傍線イ「アカウントビリティのリバイバルが生じている」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 政治改革により再度透明性を高めようとしていること。
- B 非言語的な仲間内の伝統が再び求められてきたこと。
- C また答責性が重視されるようになってきたこと。
- D 日本の特殊性がもう一度指摘されるようになること。
- E 昔のことを改めて説明する責任が生じてきたこと。

問4

18

空欄ウに入る語句として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 批判の対象
- B 比較の方法
- C 批判の余裕
- D 比較の対象
- E 批判の基準

問5

19

傍線Ⅰ「政策の手段同士はときとしてトレード・オフの関係にある」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A ある政策を達成するために、何か他の政策を犠牲にしなければならないということが起こることがある、ということ。
- B ある政策を達成するために、時には対象となる国や人権問題と対立することを避けられないこともある、ということ。
- C ある政策を達成するために、それと矛盾している政策は自動的に取り下げられてしまうことがありえる、ということ。
- D ある政策を達成するために、他のすべての政策の審議や実行を一時止めることも起こる可能性がある、ということ。
- E ある政策を達成するために、それと正反対な政策をとる国と関係を排除することも時としてやむを得ない、ということ。

問6

20

傍線オ「表現できないから察しろと求めるのは、これからの世代には通じない」とあるが、それはなぜか。理由として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A これからの世代は太平洋戦争や冷戦などを体験していないので、最近は「右傾化」していて危険だと説教されても、実感として響くことが期待できないから。
- B これからの世代は多様化する社会で生きていくので、どれだけアカウンタビリティを大切にしたらとところで、幅広い合意の形が難しくなっていくから。
- C これからの世代はアカウンタビリティを重んじるので、暗黙の合意で処理されてきた事案が表面化すると糾弾が殺到し、誰も弁護できなくなってしまうから。
- D これからの世代は相互依存の進む世界で生きていくので、「自由を認めず開かれていない」相手に対しては、「自由で開かれた」態度を放棄してよいから。
- E これからの世代は「自由で開かれている」という理念を大切にするので、説明がつかないことは受け入れがたく感じ、アカウンタビリティを重視するから。

問7

21

以下の(い)～(は)の記述は本文の内容とどのような関係にあるか。説明として最も適切なものを、**選択肢A～H**の中から一つ選べ。

(い) 日本の政治経済のシステムが西欧近代国家の普遍的なそれとは異なる「特殊性」を持っていることは、それが肯定的であれ否定的であれ、日本を論じる時に前提になっていることだといえる。

(ろ) 「日本にはアカウンタビリテイが欠如している」とあるジャーナリストが主張したことをきっかけに、一九九〇年代以降、日本は政治においてだけアカウンタビリテイを導入して透明性を高めようとした。

(は) 多様化する社会のなかでは幅広い合意の形成が難しいので、「説明する責任」を相手に要求するのは当然だし、罪を裁くために人民裁判や私刑の形を取ることも、ある意味やむを得ない時がある。

選択肢

- A (い) (ろ) (は) はすべて本文の内容と一致する。
- B (い) (ろ) は本文の内容と一致し、(は) は本文の内容と一致しない。
- C (い) (は) は本文の内容と一致し、(ろ) は本文の内容と一致しない。
- D (ろ) (は) は本文の内容と一致し、(い) は本文の内容と一致しない。
- E (い) は本文の内容と一致し、(ろ) (は) は本文の内容と一致しない。
- F (ろ) は本文の内容と一致し、(い) (は) は本文の内容と一致しない。
- G (は) は本文の内容と一致し、(い) (ろ) は本文の内容と一致しない。
- H (い) (ろ) (は) はすべて本文の内容と一致しない。

Ⅲ 次の文章は、本庶佑『ゲノムが語る生命像』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ【50点】

生物の無限性を垣間見る現象は、地球上に存在する生物種の多様性である。これまで記載されている生物種はおよそ180万種と言われているが、まだ確認されていない生物種が1000万種類あるという^①。スイケイ値もある。しかも、ブラジル赤道直下の砂漠に住む、雨期にのみ地上に現れる不思議なカメラや魚類の新種が発見されたという報告もあり、今後も生物種の増大は続いていくに違いない。もっとも多様な生物種が存在するのは、実は細菌類である。われわれの腸内には、想像を絶するほど多種多様な細菌が存在する。これらの細菌はほとんど培養が困難であるので、培養せずにDNAを増幅してその塩基配列で生物種を決めるという手法がとられるようになった。これは、メタゲノムという新しい分野である。この手法はヒトゲノム解読に使われた方法で、ランダムに大量の塩基配列を読み取り、その断片の重なりから全体像を明らかにしようという手法である。この方法は、深海に住む細菌層、地下深くに存在する細菌層、また生態系の変化のカイ^②セキ等に応用されている。

まとめれば、生物はゲノムという有限の壁を越え、ほぼ無限に思われる多様性を獲得してきた。しかし、その無限と思われる多様性は、この地球という環境において生き延びるための多様化であるが、地球環境の激変に対応するだけの適応力があるかは不明である。ヒトの設計図には、意味のない部分が非常にたくさんある。ヒトのDNAの中で遺伝子は、砂漠の中のオアシスのごとく、無意味な塩基配列の中に点在するように組み込まれていると、ごく最近まで考えられていた。ところが、塩基配列の決定が大規模に進められた結果、ゲノムDNAの70パーセント程度はRNAに読まれているという。つまり、タンパク質に翻訳されないRNAが大量に存在することが明らかとなった。

ところが大腸菌のような微生物においては、役に立たない部分はほとんどなく、遺伝子と遺伝子がびっしりと踵^{きびす}を **ア** ようにして設計図ができあがっている。これは、きわめて効率のよい設計図の作り方と言える。

ヒトの抗体遺伝子はリンパ球の中で、その可変部遺伝子を構成する断片が自由な組み合わせを行うことによって、非常に多数の多様な遺伝子を作り出す。このような断片間の自由な組み合わせに加えて、さらに抗体可変部遺伝子には、集中的に他の1000倍にもおよぶ高頻度の突然変異が導入される。この結果、きわめて多種多様な可変部遺伝子群ができあがる。

このような遺伝子の自由な組み合わせや変異ということから、必然的に、今日すぐ役に立つ抗体遺伝子とともに、まったく役に立た

ない遺伝子も多数生じることになる。それどころか、なかには個体にとって有害な遺伝子さえ生じることがある。

このような遺伝子の自由な変異というシステムは、われわれにさまざまなことを教えてくれる。たとえば、防御を完璧にするために多様性を増やそうとすれば、それは場合によっては両刃の剣となり、自分自身をも攻撃するような抗体が作られるかもしれないのである。しかし、われわれは、^イそのような代償を払いながら、なおかつ、外敵からの防御ということに対して備えをしているのである。

さて、無駄な抗体遺伝子がたくさん生じると言ったが、この無駄というのはよく考えてみると、今日の価値観に基づいた評価である。すべての価値観は、時代と条件によって変わるものであり、今日では無駄と考えられている抗体遺伝子は、はたして未来永劫に無駄なのかどうか、考え直してみる必要がある。

たとえば、われわれの体は、ジニトロフェノールという有機化合物に対して反応する抗体を作ることができる。ジニトロフェノールのような有機物質がわれわれの外敵として、過去において重要な物質であったとはとうてい考えられない。しかし、そのようなことと関係なく、われわれがジニトロフェノールに対する抗体を作りえるということは、われわれの体の中には、未来に^③ソウグウするかもしれない新たな外敵に対しても、すぐに対応できるほどの多様性を、われわれの抗体遺伝子系はすでに備えているのである。

具体例として、エイズウイルスと人類がソウグウしたのは過去数十年以内ではないかと言われているが、われわれはエイズウイルスに対する抗体を作る能力をすでに有している。それでも、メン^④エキ不全症となるのは、エイズウイルスが抗体産生を助けるヘルパーT細胞を壊してしまうからだ。

未来に備えられた部分は、今日の価値観では無駄であるかもしれない。しかし、そのような無駄を含んだ設計図であるからこそ、優れた防御システムとして役立ち、今日、人類がこの地球上で主導権を持つ生物種として繁栄している基礎となっているのかもしれないのである。

ヒトの遺伝情報の総体(ゲノム)の中にも、たくさん偽遺伝子や、今日では無意味と思われる領域が多数存在する。しかしこの部分も、遺伝子の再構成や転移その他によって、少なくとも部分的には、役に立つ遺伝子に変わっていく。^エ可能性がなきにしもあらずである。この余白は無駄ではなく、ヒトの設計図にとっては未来に備える大切なものかもしれない。余白がない大腸菌は、もしかしたら、未来への展望が少ないのではなからうか。

このように、われわれの設計図の成り立ちを考えると、無駄の効用ということを教えられているような気がする。あまりにも無駄を

切りつめると、将来への発展の芽をつむことになるのかもしれない。

生命の尊さは何ものにも変えがたいという表現は、生命体と生命なき物とを対比して、生命がどのような物質にも勝る貴重なものであるということの意味する。と同時に、生きることが生命体にとっては善であるという価値観を暗黙のうちに認めている。

オ

- a しかしながら、生命が物質に基礎を置いたものであり、多数の物質の高次の複合体が、生命活動を作り上げていることも疑いのない事実である。
- b 生命体のもつとも高度な機能である精神活動も、すべて物質を基礎に置いたものであることは、今日ますます明らかとなってきた。
- c DNAは物質であり、生命体ではない。
- d 生体の構成成分のどれをとっても、生命体とは明らかに区別できる。
- e

では細胞という単位は、生命体であろうか。動物細胞は試験管の中で培養することができる。培養細胞が生命体であるのかどうか、これはやや難しい問題である。動物細胞は増殖して、さまざまな複雑な機能を持つ。しかし細胞は、自分と同じ細胞を分裂によって生じるが、個体を生み出すことはない。すなわち、厳密な意味での自己複製能力に欠ける。

しかし植物細胞は、1個の細胞からニンジンやトマトを作る個体になる。また大腸菌という単細胞の生物を考えると、これは試験管の中で生きている細胞とあまり変わらない。もし、大腸菌のような単細胞生物を生命体として認めるならば、試験管の中の細胞とどう区別するのは、やはり難しい問題となる。

多数の細胞で構成された生命と、大腸菌のような単細胞生物の生命との間に、生命としての価値の差があるのかわからないのは、科学的には何とも言えないと私は思う。しかし、大腸菌を何億殺したとしても、われわれはまったく罪の意識を感じることはない。意識するとしなやかにかかわらず、われわれは明らかに、ヒトの生命は他の種属の生命とは比べものにならないほど尊いと考えているからだ。

しかしよく考えてみると、これはヒトの手前勝手な価値観であり、他の種属の生命体にとっては、まったく迷惑^⑤センバンな話であろう。

- B 多様性を増やそうとして、自分自身を攻撃する抗体が作られてしまう危険性があること。
- C ヒトの抗体可変部遺伝子には、集中的に他の1000倍にもおよぶ突然変異が導入されること。
- D 遺伝子の自由な組み合わせや変異により、まったく役に立たない無駄な遺伝子が多数生じること。
- E 当面差し迫った外敵がいなくてもかわらず、外敵からの防御ということに対して備えをしていること。

問4

29

傍線ウ「無駄を含んだ設計図であるからこそ、優れた防御システムとして役立ち」とあるが、それはどういうことか。説明として最も適切なものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 現在は何の役にも立っていないが、未知のトラブルが生じた時にすぐに対応できる可能性を持っている、ということ。
- B 〴〵無駄〴〵な抗体遺伝子というのはヒトだけが持っており、無駄のない大腸菌よりもヒトが優れている、ということ。
- C エイズウイルスのように抗体を作る能力を有しても対応できないことがあるので、無駄の有無は関係がない、ということ。
- D 未来に備えられた部分は今日の価値観では無駄であるかもしれないが、将来は必ず有益なものに変わる、ということ。
- E 設計図に〴〵無駄〴〵を含んでいるからこそ、外敵がその無駄な部分を襲ってもヒトが傷つかないでいられる、ということ。

問5

30

傍線エ「可能性がなきにしもあらず」とあるが、これと同じ意味の表現を、次のA～Eの中から一つ選べ。

- A 可能性がないかあるかという考え方は正しくない
- B 可能性がないかあるかと言われると、ない
- C 可能性がまずないと言える
- D 可能性が決して少なくともなくある
- E 可能性が少しだけはある

問6

31

次の一文は、段落オ中の空欄 a ～ e のどこに入れるのが正しいか。次の A ～ E の中から一つ選べ。

しかしながら、生命体と物質とは、明確に区別される。

A

a

B

b

C

c

D

d

E

e

問7

32

以下の (い) ～ (は) の記述は本文の内容とどのような関係にあるか。説明として最も適切なものを、選択肢 A ～ H の中から一つ選べ。

(い) 地球上に存在する生物種は、地球という環境で生き延びるためにほぼ無限に思われる多様性を獲得してきたが、

今後地球環境がどんなに変わったとしても全ての変化に適応できる、とまでは言い切れない。

(ろ) 現在では、われわれの体がジニトロフェノールに反応する抗体を作れることは、無駄な抗体遺伝子を生じさせていることになるが、過去に必要だったからその力があるので、決して「無駄」なことではない。

(は) 細胞という単位が生命体であるかどうかはやや難しい問題であり、同時に、単細胞生物の生命と多細胞で構成される生命との間に生命としての価値の差があるのかも、科学的には何とも言えない。

選択肢

A (い) (ろ) (は) はすべて本文の内容と一致する。

B (い) (ろ) は本文の内容と一致し、(は) は本文の内容と一致しない。

C (い) (は) は本文の内容と一致し、(ろ) は本文の内容と一致しない。

D (ろ) (は) は本文の内容と一致し、(い) は本文の内容と一致しない。

- E** (い) は本文の内容と一致し、(ろ) (は) は本文の内容と一致しない。
- F** (ろ) は本文の内容と一致し、(い) (は) は本文の内容と一致しない。
- G** (は) は本文の内容と一致し、(い) (ろ) は本文の内容と一致しない。
- H** (い) (ろ) (は) はすべて本文の内容と一致しない。